

This number

2024年度のクマ事情



撮影：東京農工大学 安田和真さん

★恒例の日本全国のクマに関わる情報を整理してお伝えする「クマ事情」特集です。

本号でお伝えする昨年度**2024年度**は、西日本において出沒数が多い年となりました。その結果、捕獲数や出沒数が大きく増加する傾向が確認されました。また、東京や神奈川などの関東地区のクマ情報の増加も気になる年でした。

2024年4月にクマ類は「指定管理鳥獣」に指定されて一年が経ちました。クマ類総合対策事業として、①特定計画・指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画等の策定、生息状況調査等、②クマ類の捕獲等（人の生活圏周辺等）、③出沒防止対策（誘引物管理、緩衝帯整備、柵の設置、普及啓発等）、④出沒時の体制構築（出沒情報収集提供、出沒対応訓練、対応マニュアル作成等）、⑤専門人材育成（都道府県・市町村職員、捕獲技術者育成の研修会等）が実施されていきます。

その中で、重要視されているクマ類の保護・管理に係わる専門人材の育成に関して、各地で少しずつですが進み始めているのではと、最近感じております。クマ人材の育成と育成されたクマ人の活躍を後押しできるように、日本クマネットワークとしてもサポートできたらと考えます。各地区のクマ事情の中では、クマの管理の現場に携わる方々が課題を挙げています。各地区の状況を、知っていただき、ナイスサポート！の第一歩になるような「クマ事情」であればと思います。

（編集責任：伊藤 哲治）

全国の状況・・・P5～7 環境省が発表している全国のクマ類の捕獲、出沒、人身事故の情報（右側二次元バーコード、最終確認2025年5月20日）や農林水産省が発表する農業被害の状況について、近年のトレンドを整理しました。



JBNクマ保護管理推進委員長・伊藤 哲治（酪農学園大学）

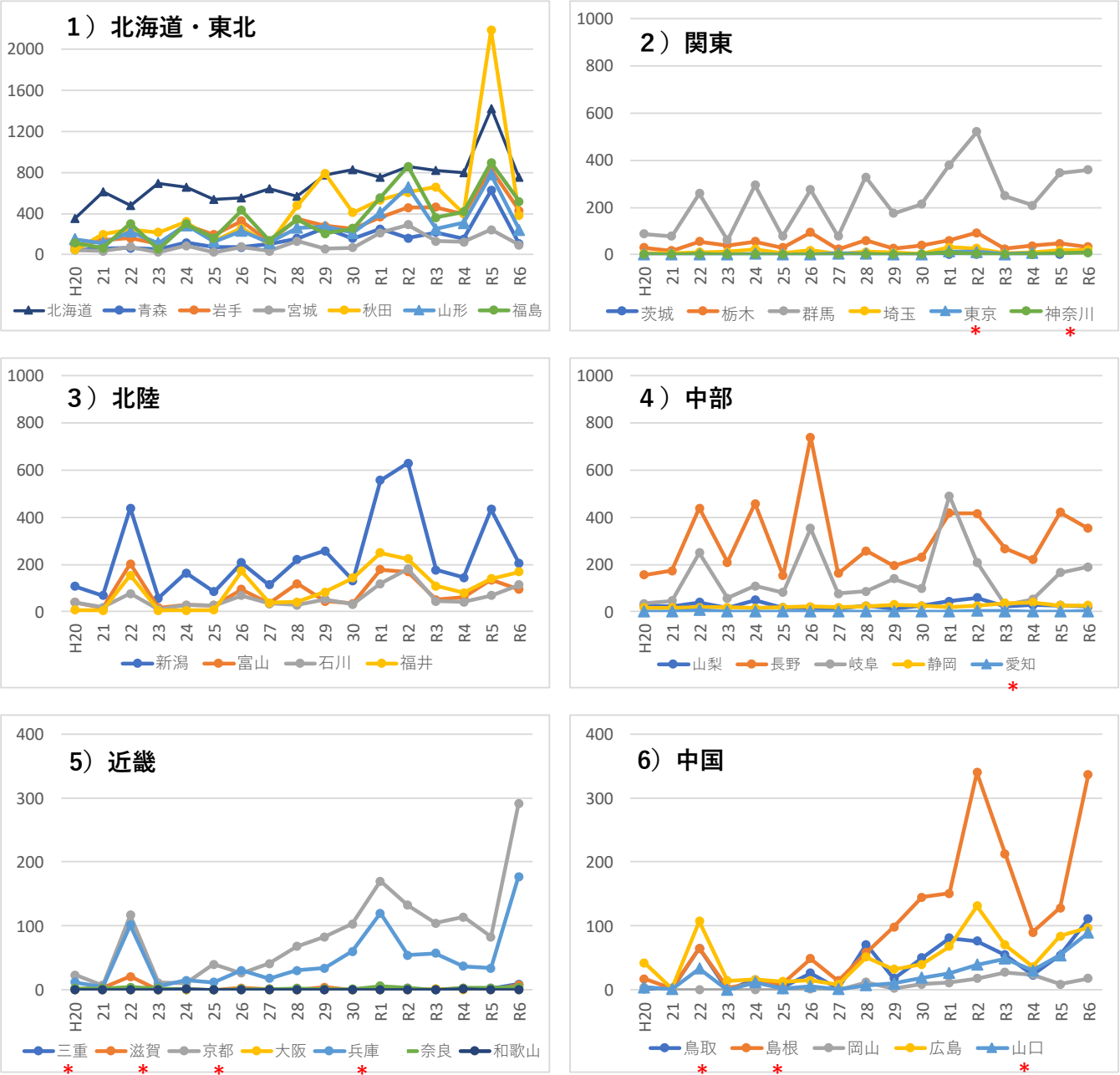


図1. 平成20/2008～令和6/2024年度のクマ類の捕獲数(頭)

- ・ 環境省webサイト（2025年5月2日付）の情報より。
- ・ 捕獲数は許可捕獲数（有害鳥獣捕獲と数の調整捕獲で、捕獲後に放獣された頭数も含めた合計値）。
- ・ 2024年度の捕獲数が「過去5年間の平均値×1.4」より多かったところに*を付けた（この基準は「ツキノワグマの大量出沒に関する調査報告書（自然環境研究センター2005）」と同一）。

2024年度の捕獲数が多く
なっていたのは、西日本の
一部の地域。
過去最多の捕獲数：東京・
三重・京都・兵庫・鳥取・
山口

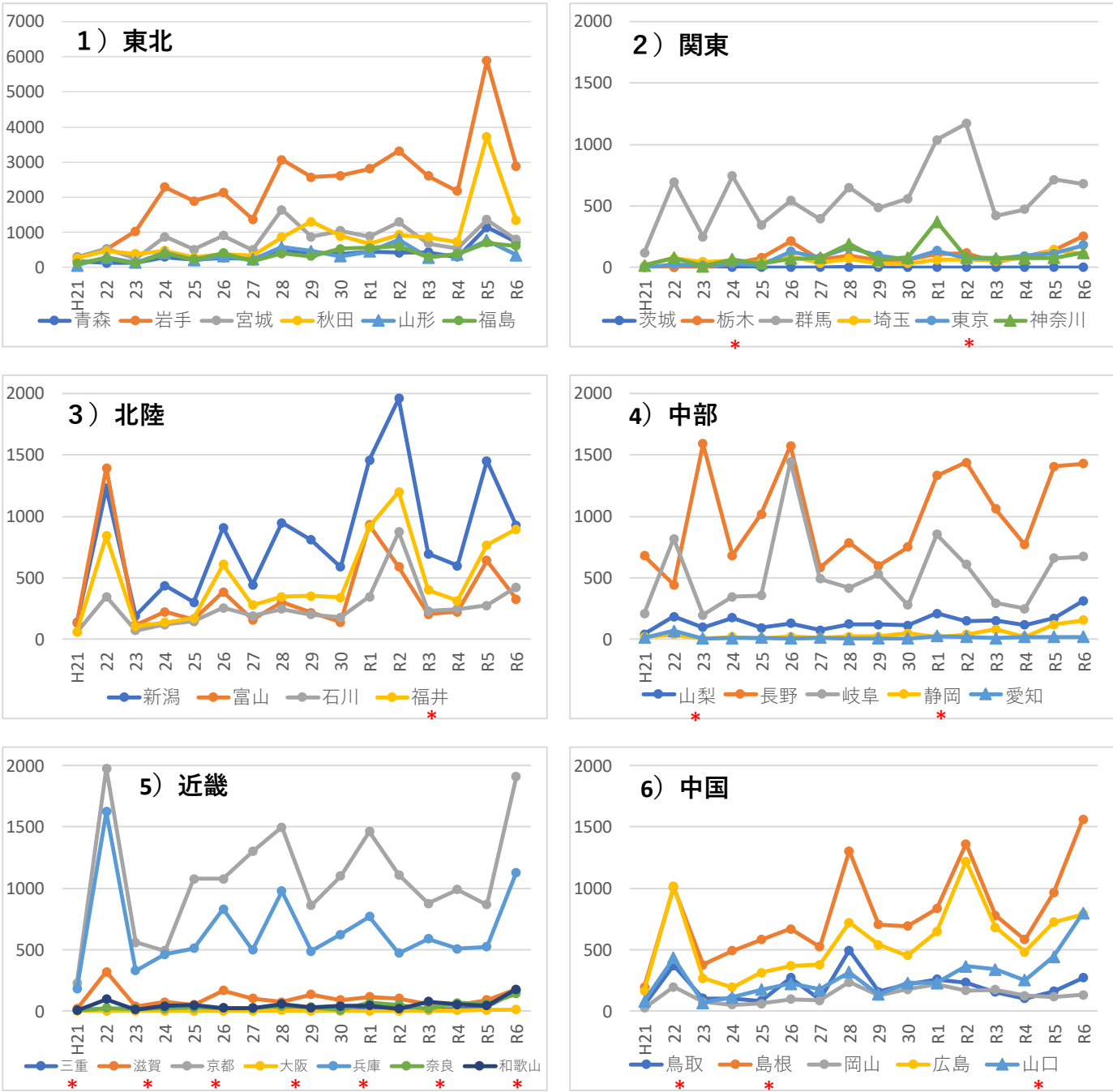


図2. 平成21/2009～令和6/2024年度のツキノワグマの出没情報数

- ・ 環境省webサイト（2025年4月26日付）より。
- ・ 都道府県毎に異なる方法で集計（警察への通報件数、市町村からの情報等）。
- ・ 長野県のデータについて。上記の環境省発表の情報ではH28年度までの値は「里地と山地」での目撃数、H29年度以降は「里地のみ」での目撃数となっている。本グラフはH28年度以前も「里地の目撃数」を、長野県のwebサイト（下部二次元バーコード）から引用して使用した。
- ・ 北海道は平成28/2016年度以降、道としての出没数の公表がない。

2024年度の出没情報数が多かったところに*をつけた。

- ・ 栃木・東京で過去最多
- ・ 山梨・静岡で過去最多
- ・ 西日本の出没数は例年より多かった。過去最多：三重・大阪・奈良・和歌山・鳥根・山口
- ・ 福井は多かった。

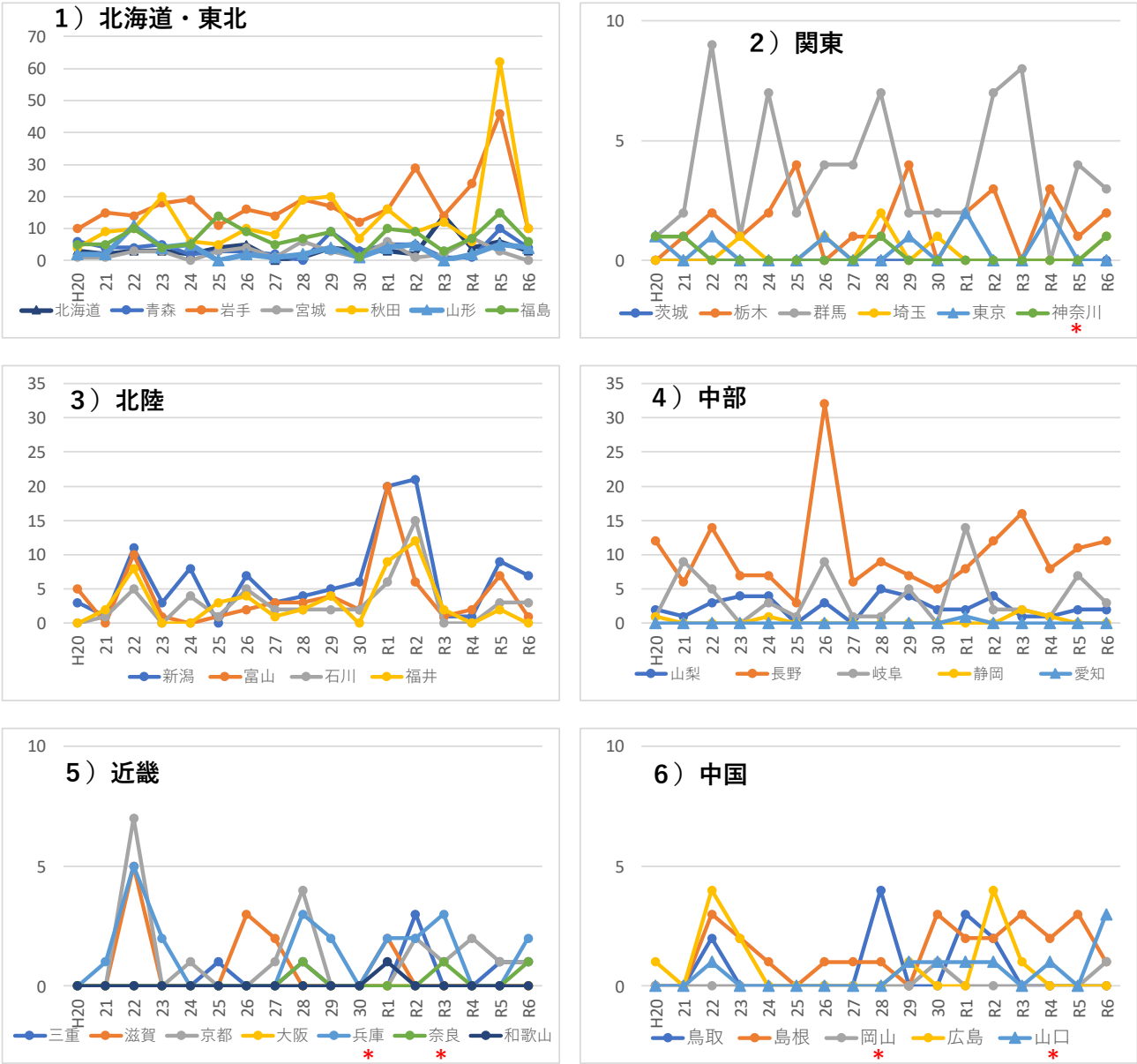


図3. 平成20/2008～令和6/2024年度のクマ類による人身被害（人数）

- ・ 環境省webサイト（2025年5月12日付）より。
- ・ 2024年度に人身被害に遭われた方の人数が例年より多かったところに*をつけた。

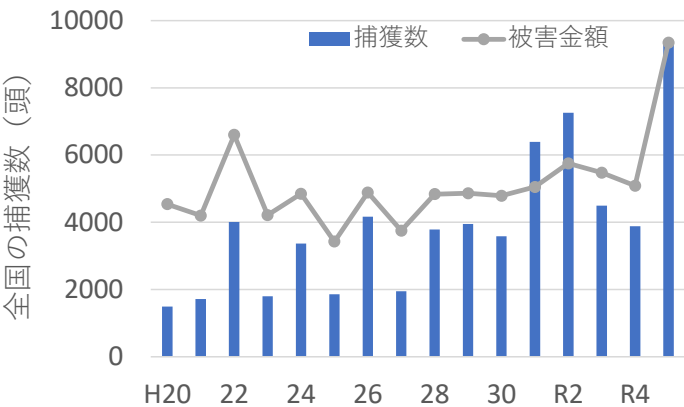


図4. 平成20/2008～令和5/2023年度のクマ類による農作物被害額と捕獲数

- ・ 捕獲数は図1と同じデータ、農作物被害額は農林水産省発表のデータ（下部二次元バーコード）を使用した。
- * ツキノワグマ・ヒグマの合算



2023年度の被害金額は大幅に増。捕獲数も過去最多。ニホンザルの被害金額を上回る。

各地区の状況 P8～20 各地区の代表地区委員からR6/2024年度の状況についてご報告いただきました。ご協力いただいた地区委員、関係機関の皆様、大変有難うございます。

北海道 P 8	東北 P 10	関東 P 11
北陸 P 13	中部 P 15	近畿 P 17
中国 P 19	四国 P 20	九州からの報告事項はありませんでした。

- ①出没の傾向、②人身事故の発生状況、③捕獲数の傾向、④農作物被害の発生状況
⑤堅果類の結実状況、⑥出没対策として取り組んでいることや良い事例等、
⑦その他特筆すべき状況、JBNとして取り組むべきと考えること、をまとめていただきました。



釣賀 一二三（北海道立総合研究機構）、早稻田 宏一（NPO法人 EnVision環境保全事務所）、山本 牧（NPO法人もりねっと北海道）、伊藤 哲治（酪農学園大学）、葛西 真輔（合同会社ワイルドライフプロ）

① 出没 ▶地域による違いはあるものの、報告のあった4地域（札幌市、旭川市、占冠村及び知床半島）においては2023年と比較して出没件数が減少しており、全道的にも同様の傾向であった印象である。▶札幌市における出没件数は99件で、前年度の半分に減少した。一部の地域では、親子あるいは若いオスの個体が繰り返し出没したが、それ以外は散発的な出没であった。▶旭川市では、2023年（120件）よりやや少ない104件の通報が寄せられ、うち78件がヒグマによるものと考えられた。なかには、特定の個体が繰り返し目撃された事例が含まれる。6～8月に活動が活発化しており、10月を中心にコーン畑や果樹園での食害が発生した。▶占冠村における市街地や農地隣接地域でのヒグマ目撃件数は、冬眠明けから8月末までは例年と同様の増減傾向を示したが、全体的に少なかった。また、春の出没ピークは例年4月末～5月上旬であったが、2024年は5月下旬と遅かった。9月以降は顕著に出没情報が少なくなり、秋に多数の情報が寄せられた前年とは対照的であった。これは、人里周辺におけるヒグマの滞在時間や行動内容の違いによるものと考えられる。出没情報の内容については、例年同様、初夏に上トマム（村東部）市街地で接近事案があり、夏の双珠別地区（村南部）における牧草被害は前年より減少した。デントコーン被害についても、例年より少なかったと考えられる。10月以降における人里周辺での情報減少

は、ミズナラ堅果の豊作と関連付けられる可能性がある。▶知床半島については、大量出没年だった2023年度から一転し平年並みであった。市街地（第2期知床半島ヒグマ管理計画におけるゾーン4）への出没件数は、2023年度の399件から70件（10月末時点）へと減少している。

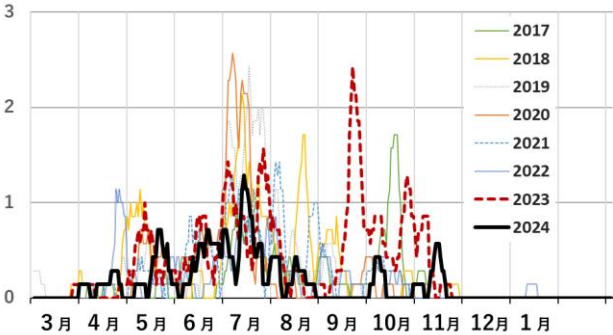


図5 ヒグマ目撃通報件数の7日間移動平均値(前3日と後3日を平均することで曜日の影響を除いた)

② 人身事故 3件3名の被害が発生した。1件目は、5月に浦河町の農地に隣接した河畔林内で山菜採り中に発生した。同行者はいたものの被害者は単独行動で、クマによる防御的攻撃であった可能性が指摘されている。▶2件目は、6月に雨竜町の水田に隣接した森林内で斜面崩壊地の調査中に発生した。こちらも同行者はいたが、数十メートル離れて互いの姿が見えない状況で作業を行っていた。結果的に親子グマを囲い込む形になってしまったことや、加害個体の突進に対して背を向けて走って逃げたことが、事故原因と推測されている。▶これら2件については、いずれも農地に隣接した森林内における負傷事例であり、近年の分布拡大によって人の生活圏に近い場所でもヒグマが活動していることに関して、あらためて注意を促すことが重要である。

▶3件目は、7月に斜里町の農地に隣接した防風林内で、有害捕獲を目的とした巻き狩りに参加していた捕獲者が負傷した事例である。「待ち」に配置された被害者が至近距離から襲われたが、別の捕獲者によって加害個体は捕殺された。



斜里町人身被害

③ **捕獲数** ▶2025年3月時点で、753頭（暫定値、環境省）の許可捕獲があった。確定値では増加すると考えられるが、2023年度と比較して大幅な減少となる見込み。▶札幌市では、以前から市街地周辺で出沒を繰り返している親子と推測される2頭のヒグマを、それぞれ箱罠により捕獲した。このことは、出沒現場で採取した試料と捕獲個体のDNA分析による個体識別結果により確認されている。▶旭川市では、果樹被害への対応として3箇所の農園に電気柵を緊急設置し、その後被害は発生しなかった。また、2頭を捕獲した。▶占冠村においては、5頭が許可捕獲された。そのうち4頭がデントコーン被害防止目的の箱罠による捕獲で、1頭は市街地に侵入したことによる生活安全被害防止目的の銃器捕獲であった。そのほか、酪農学園大学による学術捕獲（生体捕獲）が1頭あり、標識装着後に放逐された。▶知床半島地域に関しては、捕獲等ヒグマの人為死亡数が平年並み（31頭、11月時点）であったものの、町によっては市街地への侵入や農地への出沒が目立つ状況もあった。

④ **農作物被害** ▶発生状況に特筆すべきことはなし。

⑤ **堅果類の結実状況** ▶道による調査（北海道森林管理局、大学演習林、市町村、自然環境保全団体、道総研、道（総合）振興局職員等が実施）では、渡島半島のブナが豊作、全道のミズナラは並作～不作であった。また、漿果類ではヤマブドウが豊作～不作、サルナシは並作～不作で、地域による状況の違いは見られたものの、概ね良好な実なりであったと考えられる。

⑥ **出沒対策** ▶札幌市：2024年度から「さっぽろヒグマ基本計画2023」に基づくヒグマ対策重点エリアを設定し、各種対策を強

化している。問題個体の捕獲も進み、出沒数が抑制されつつある。また、環境省事業により、隣接する北広島市と合同で市街地出沒の訓練を実施した。市町村をまたがって出沒した場合の関係機関における情報の流れを共有し、それぞれの対応方針を踏まえて、捕獲に至るまでの流れを確認した。▶旭川市：2023年度から開始された、出沒要因やモニタリングの調査及び普及活動（外部団体に委託）を継続し、ヘア・トラップで採取した体毛やフンなどを用いたDNA分析による個体識別が実施され、2カ年で27頭の個体を識別した。また、今年度から緊急対応時における捕獲従事者の射撃技術維持向上を目的として、ヒグマ捕獲従事者を対象とした射撃訓練が実施された。▶占冠村：村役場と警察署によるヒグマ市街地侵入対応訓練を実施した。実際の侵入時には臨機応変の対応が求められるため、予め具体的な対応手段を規定しておくことはできず訓練が形骸化する懸念もあるが、対応時の考え方を共有する機会としては有益であった。



占冠村出沒対応

⑦ **その他** ▶道が策定する「北海道ヒグマ管理計画(第2期)」の期中改訂が実施され、あつれきの軽減に向けて1) ゾーニング管理、2) 個体数管理、3) モニタリングの充実、4) 専門人材の育成・確保に関する事項が盛り込まれた。▶札幌市：出沒現場対応などで採取した試料のDNA分析による個体識別を実施することにより、個体レベルでヒグマの状況が把握され、管理に活用されている。個体数調整が求められている中で、個体レベルで管理を進めていく意義について関係者で意見交換する機会が必要である。▶占冠村：村の行政におけるヒグマ対応専門職員の配置に関して、野生鳥獣専門職を現在の1名体制から2名体制に拡充することを計画。2025年度から、当該分野の教育を受けた大学院卒業生1名を雇用し、業務に従事させながら育成する予定。▶知床半島地域に関する情報は以下を参照。



北海道管理計画



◀知床管理目標

▶知床対応状況





大西 尚樹（森林総研東北支所）
 鶴野-小野寺 レイナ（慶大先端生命科学・鶴岡市）
 近藤 麻実（秋田県自然保護課）

概況 ▶2024年度は、6県すべてでツキノワグマの出没が広範囲に確認された。青森、岩手では出没件数が高水準を維持し、特に6月にピークを迎える地域が多かった。冬季においても出没が継続した地域があり、活動期の長期化がうかがわれた。人身事故では青森、福島で死亡事故が発生した。農作物被害は多くの県で集計中だが、堅果類の結実状況は概ね並作から豊作であり、各県では個体数調査や管理体制の強化など新たな保護管理の取り組みが進められている。

① 出沒 ▶青森県：出没件数は728件で、2023年の1,132件からは大幅に減少したが、2011年以降では2番目に多かった。過去10年間（2022年まで）の平均出没件数（366件）の約2倍である。出没のピークは6月であり、6月単月としては過去最多を記録した。▶秋田県：出没のピークは例年と同様6～7月で、8月中旬以降は急激に減少した。しかし、11月末の降雪以降出没が増加し、特に山林から遠く離れた市街地での出没が目立った。年度全体では1,340件で、直近10年間では2023年の3,723件に次いで2番目に多かったが、2024年から情報の集計方法が変わっていることに注意が必要である：2023年度までは県警に通報された件数のみを出没件数としていたが、2024年度からは県警に通報された件数、市町村に通報された件数、クマダス（後述）に投稿された件数の3種類の情報を加えたものを出没件数としている（3種類の情報に重複は無い）。▶岩手県：出没件数は約2,800件で、6月にピークを迎えた後、11月にはほぼ終息した。市街地での出没も散発的に発生した。冬期（1～3月）には52件の出没があり、これは2003年以降では最多だった2023年（59件）に次いで2番目の多さであった。▶山形県：春の目撃も通常年の傾向を示し、秋も山の資源量が多かったため、出没は平年並みもしくはそれ以下であった。東北の他県と同様、冬眠期間中の目撃も報告された。冬季に出没した個体の傾向として、大量出没年の2023-24の冬

は仔グマの出没が多かったが、今シーズン（2024-25）は成獣が多かった。また2025年の春先の目撃も早い傾向にある。▶宮城県：春から秋にかけての目撃は平年並みかそれ以下であり通常年の値を示しているが、冬季の目撃は過去5年で最も多い。▶福島県：出没件数は613件で、2023年（709件）より減少した。6月には189件の出没があり、6月単月としては2016年以降最多を記録した。

② 人身事故 ▶青森県：5月から8月にかけて4件4人の人身事故が発生し、このうち1件では山菜採り中の女性がクマに襲われ死亡した。事故は八甲田山麓の青森市荒川で集中して発生し、これを受け、6月28日から約3か月間にわたり入山規制が実施された。▶秋田県：10件11名が被害に遭った。このうち山林内での事故、人の生活圏での事故は各5件だった。市街地での出没が増加した11月末には開店準備中のスーパーにクマが入り込み、店内で従業員が襲われる事故が発生した。▶岩手県：6件の人身事故が発生し、うち1件は溪流釣り中、4件は農作業中に発生した。▶山形県：人身事故は4件発生した。そのうち、2024年は3件、山菜採りや登山中などの山中の事故であった。また年が明けて2025年の2月に狩猟中の事故が発生した。冬季の事故は初めてであるとともに、イノシシの有害駆除の際に、居合わせたクマに発砲して反撃された。このことは冬季もクマが動いていることを意味していた。▶宮城県：人身事故は0件であった。宮城県の人身事故数は東北の他県と比べて多くはないが、0件であったのは平成24年以来、12年ぶりのことである。▶福島県：6件6人の人身事故が発生し、このうち1

件では昭和村で山菜採り中の男性がクマに襲われ死亡した。



③ **捕獲数** ▶青森県：有害捕獲数は99頭で、2023年の1/6以下に減少した。過去10年間（2022年まで）の平均（162頭）も大きく下回った。▶秋田県：有害鳥獣捕獲は366頭だった。捕獲数が増加した2016年度以降では、2022年の361頭に次いで2番目に少ない捕獲数であった。▶岩手県：有害捕獲数は424頭で、2019年以降続いている「例年並み」（400頭前後）の水準であった。大量出没があった2023年の831頭と比較するとほぼ半減した。▶山形県：2024年度の有害捕獲数は240頭（環境省2月末集計値）で、過去5年の中で最も少なかった。▶宮城県：2024年度の有害捕獲数は95頭（環境省2月末集計値）で、過去5年の中で最も少なかった。▶福島県：有害捕獲数は515頭で、過去10年間（2014～2023年）の平均（446頭）と同程度であった。

④ **農作物被害** ▶青森県 & 岩手県 & 福島県：農作物被害額は現在集計中である。▶秋田県：農作物被害状況（金額、面積）は現在集計中。▶山形県 & 宮城県：現在集計中だが、秋の出没が少なかったため果樹等の被害もほぼ少なく、被害額は少ないと予想される。

⑤ **堅果類の結実状況** ▶青森県：ブナの結実量は津軽地方では並作から豊作、下北地方および三八上北地方では豊作であった。▶秋田県：ブナ、ミズナラとも並～豊作であった。▶岩手県：ブナの結実は奥羽山系では並作、北上山地では豊作であった。▶山形県：ブナは並作（県の一部は豊作）、コナラ、ミズナラは豊作であった。▶宮城県：ブナ、コナラは豊作、ミズナラは並作であった。▶福島県：ブナとコナラは並作、ミズナラは豊作であった。

⑥ **出没対策** ▶秋田県：2023年度の大量出没を受けて、全県的に放置果樹の伐採や人身事故現場付近の刈り払いが積極的に進められた。▶岩手県：ツキノワグマの出没や人身被害の増加を受け、「岩手県ツキノワグマ対策パッケージ」が策定された。人の生活圏への出没防止、出没時の緊急対応、個体群管理の強化、人材育成・確保の4つを柱とする総合的な対策である。▶山形県：果樹の受粉用のハチ箱を回収した。大量出没の翌年だったため、被害対策としての意識が強まっており、放置

果樹を伐採することに概ね同意する傾向にあった。また交付金の拡充により放置果樹の伐採費用の県予算が付いた。

⑦ **その他** ▶青森県：県全域で個体数調査が行われ、ツキノワグマの推定生息数は1,614頭（推定範囲940～2,924頭）とされた。さらに、東北地方で唯一管理計画がなかった青森県において、保護管理対策検討委員会が発足し、2025年度中の計画策定に向けた議論が始まった。▶秋田県：鳥獣管理に関する専門職が3名体制となり、全県各地で普及啓発や人身事故の検証、出没対応支援等の各種対策を強化している。7月からツキノワグマ等情報マップシステム「クマダス」の運用を開始した。これはクマの目撃情報や人身事故情報をマップ化して公開・メール配信するシステムであり、秋田県公式LINEからも情報取得可能となっている。12月には県公式ウェブサイト「クマについてよくあるご意見・ご質問」のページ（二次元バーコード）を新設。クマに関する正しい情報の普及に努めている。



秋田県クマについてよくあるご意見・ご質問

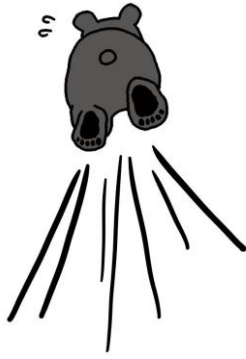


稲垣 亜希乃（東京農工大学）、茨城県：後藤 優介（茨城県自然博物館）、栃木県：丸山 哲也、群馬県：姉崎 智子（群馬県立自然史博物館）、埼玉県：石田 健、東京都：山崎 晃司（東京農業大学）、神奈川県：長縄 今日子 & 羽太 博樹（共に丹沢ツキノワグマ研究会）

① **出没** ▶茨城：なし。▶栃木：目撃は255件で、前年度の142件より大幅増。6月が84件で最も多かった。▶群馬：目撃・出没678件、前年度は727件（県自然環境課による）。▶埼玉：県HPでは108件（うち3件は、クマでない可能性）が3月末時点で報告。前年度の144件よりもやや少ない数字ながら、ほぼ同等の出没状況だった。市町村別に公表されている出没件数は、秩父市37件、小鹿野町26件、飯能市が24件、皆野町と横瀬町で各4件、寄居町で2件、入間市、越生町が各1件だった。前年度目撃情報のあった東秩父村、小川町、日高市からは目撃情報なし。前年度に引き続き、関東平野に面した東～北の地域からの目撃情報があること、前年度と今年度に秩父市域周辺で1-2月に数件のクマ出没目撃情報が

出ていることから、今後の動向に注意が必要。

▶神奈川：初夏から夏にかけて一時的に人里出沒が続いたが、年間を通した出沒状況は平年並みであった。▶東京：2023年の114件から181件と増加傾向にあるが、イノシシの誤認などを含め確度の低い情報も含まれると考えられる。



② **人身事故** ▶茨城＆東京：なし。▶栃木：2件発生。うち1件は親子連れと思われる個体によるもの。▶埼玉：小鹿野町で1件発生。自宅敷地内で遭遇し、顔や首をひっかかれる。▶群馬：3件発生。みなかみ町で散歩中に遭遇2件、安中市で誘引物により自宅敷地内侵入が1件だった。▶神奈川：1件発生。2月に登山者1名が冬眠穴から出てきた個体に指をかまれた。

③ **捕獲数** ▶茨城：なし。▶栃木：有害捕獲は33頭で、平年並み。このなかには錯誤捕獲も含む。▶群馬：362頭。前年度に引き続き350頭を超えた。▶埼玉：詳細は不明。環境省の公表している速報値では20頭を捕殺駆除。従来の範囲といえ、前年度から多めの推移の状況に変化はない。▶東京：12頭が許可捕獲された。奥多摩町ではくくり罠や箱罠での錯誤捕獲が発生しているほか、シカの管理捕獲中やクマの追い払い中に捕獲従事者に向かってきたためとされる緊急捕獲も含まれた。▶神奈川：狩猟は自粛中のため捕獲実績なし。有害捕獲は、8月に飼養の鶏に執着した個体を1頭捕獲後に捕殺。錯誤捕獲は、シカ・イノシシ用のわなで計7件発生（くくり罠4件、箱罠3件）。うち5頭は奥山に放獣し、1頭は安全上等の理由から、また1頭は放獣場所の確保が困難なため、捕殺された。錯誤捕獲は5月から8月に3件、10月から11月に4件発生。

④ **農作物被害** ▶茨城・東京：なし。▶栃木・群馬：2024年度分は未発表。▶埼玉：被害はあると思うが、秩父地域では従来から報告などが無い。▶神奈川：飼養の鶏への食害が発生したほか、人里にクマが出沒した際、柿、栗、養蜂等に被害が発生した。

⑤ **堅果類の結実状況** ▶茨城：未観測。

▶栃木：県北地域のミズナラの結実が悪化したものの、高原地域のミズナラ、コナラ及び県南地域のコナラの結実が改善し、全体としては概ね良好な結実。▶群馬：全体としては不作。樹種別ではブナ、ミズナラ、コナラが不作、クリは並作、ミズキは大凶作。▶埼玉：石田氏の独自調査（トラップ及び観察）では、ブナはほぼ凶作、ミズナラは一部に結実個体がみられる程度の並作の下（2025年4月に当年生実生もみられた）、コナラも並作ないしは並作の下だった。カシ類も並作以下のものであるが未確認。▶東京：定量的な情報は公開されていないが、ブナ類を除く主な堅果類は並作以上と考えられた。▶神奈川：ブナとミズナラは、結実がほとんど見られなかった。コナラは、丹沢山麓では並作以上の個体もあったが、東京都、山梨県と接する小仏山地での結実はほとんどなかった。一方、丹沢山地ではオニグルミ、クヌギの結実が比較的多くみられた。ヤマボウシは不作。なお、ミズナラは、もともと県内で現存量が少なく、個体差や地域差があるため豊凶判断には留意が必要。



⑥ **出沒対策** ▶栃木：北海道の業者が開発したクマが開けられない構造のゴミ収集ボックスを、県内3箇所に試験設置し、自動撮影カメラによる観察を継続している。▶群馬：錯誤捕獲防止タイプのわなを用いる市町村もある。クマ人身被害防止にむけたパンフレットその他、クマに出会ってしまったら、クマスプレーの使い方等、人身被害防止のための動画を制作、県HPで公開。群馬県クマ出沒マップ（アプリ）も制作、運用中。▶埼玉：秩父札所の普及を目的として民間団体のホームページで「くまっぷ」という巡礼をする方たちを対象にした、クマ出沒情報のとりまとめ・速報のページができた。秩父市の安全安心メールよりは数日遅れるものの、巡礼の34ヶ寺のある地域、登山以外の多くの人々が歩く範囲の出沒情報が一覧でき、普及啓発にも有用。埼玉県のみどり自然課でも、埼玉県ツキノワグマ出沒マップを開始した。▶東京：東京都による委託調査としてヘアトラップによる個体

数推定、GPS首輪装着による行動圏調査が実施されたが結果については開示されていない。目撃情報については「東京都ツキノワグマ目撃等情報マップ-TOKYOくまっぷ」が東京都HPに公開されて、その情報の確度も付加して随時更新されている。▶神奈川：かながわ鳥獣被害対策支援センターの技術支援のもとで、自動撮影カメラによる人里への出没監視や柿畑、養蜂場等への侵入を防ぐ電気柵の設置等が行われた。また、2023年度に県内で錯誤捕獲が多発したことを受けて、県は2024年度に錯誤捕獲防止タイプのわなを用いたシカ・イノシシ捕獲の試行を行うとともに、適切なわな設置を呼び掛けるチラシを配布するなど、錯誤捕獲発生 の低減に努めている。

⑦ その他 ▶茨城：ツキノワグマは未定着としている茨城県だが、2024年にクマ類が指定管理鳥獣に指定されたことを踏まえ、2025年3月に茨城県ツキノワグマ管理計画が策定された。生息域拡大前の段階から、現状のモニタリングを行うことと、普及啓発や注意喚起に取り組んでいくことを目的としている。▶群馬：2024年度、群馬県ツキノワグマ適正管理計画を一部改訂。検体ベースと、カメラトラップベースのモニタリングを強化。▶埼玉：クマの出没地域は確実に広がって都市部にも接近しているので、JBNのまとめた情報などを県、地元関係者にも発信したい。会員による講演やラジオなどの活動も効果的である。▶東京：東京都では現在のところクマの特定計画の策定は行われていない。▶神奈川：丹沢山地では、NPO団体を中心に県民や団体、企業、行政等の協働による広葉樹等の植樹活動が継続して行われており、その中で、クマの糞分析後の種子から育てた苗木も一部植栽されている。



白石 俊明（立山カルデラ砂防博物館）
箕口 秀夫（新潟大）
有本 勲（山立会）

概況 ▶新潟、富山、福井は堅果結実の状況が不作～並作、石川はブナ凶作・ミズナラ豊作で、4県とも良好か悪くはない状況で、秋の大量出没は生じなかった。しかし春～夏の出没数は大量出没年や準大量出没年であった

2023年よりも多く、特に福井は過去に例の無い出没の多さで「夏ピーク型の大量出没年」となった。北陸地区は出没年ではない平年の出没数が明らかに漸増していて、人身事故も秋以外の季節、クマの生息地以外と考えられていた地点で多く発生している。これまでの「秋の山の実りが悪いが故の」では説明できない現状となっている。

① 出沒 ▶年間の出没数を過去10年の平均と比較すると、新潟と富山はやや少なく、石川（1.4倍）と福井（1.6倍）は多かった。中でも福井は春～夏の出没数が極めて多く2004年の統計開始以降最多で、過去10年の同期平均の2倍を越えた。その結果、福井は秋の出没数は平年並みだが春～夏の急増により大量出没年と同水準、過去4番目に多かった。他県も春～夏の出没数は2023年より2024年の方が多かった。2023年秋の堅果結実が悪かった影響を引きずった可能性もあるが秋前の出没が増えている要因は特定できない。なお4県とも過去10年の平均算出には2～4回の大量出没年・準大量出没年を含んでいる。



表1 2024年の北陸4県 の堅果結実・出沒・人身事故の概況

県		新潟	富山	石川	福井
堅果結実	ブナ	△	△	×	△
	（前年・2023年）	×	△	○	×
	（前々年・2022年）	○	△	×	△
	ミズナラ	○	○	◎	△
	（前年・2023年）	△	△	○	△
※1	（前々年・2022年）	○	△	◎◎	○
	コナラ	○	○	○	△
	（前年・2023年）	△	△	○	△
	（前々年・2022年）	○	○	○	○
出沒	1-12月の件数	940件	333件	420件	899件
	（2014-2023平均）	（983件）	（379件）	（304件）	（554件）
	9-11月の件数	213件	98件	177件	300件
	・秋の占有率	・23%	・29%	・42%	・33%
	（2014-2023平均）	（464件・38%）	（225件・47%）	（125件・32%）	（275件・41%）
※2	事件・人数	7件・7名	1件・1名	3件・3名	0件・0名
	（2014-2023平均）	（6.9件・7.8名）	（4.1件・5.2名）	（3.2件・3.9名）	（3.5件・3.6名）
	頭数	203頭	94頭	113頭	169頭
	（4月-翌3月）				
	（2014-2023平均）	（287頭）	（92頭）	（67頭）	（131頭）
※3					

※1 堅果結実 凡例：◎豊作、○並作、△不作、×凶作、石川県は「◎◎大豊作、××大凶作」の指標を用いる。
※2 石川県は目撃のみで痕跡等を含まない。
※3 年度計の許可捕獲数

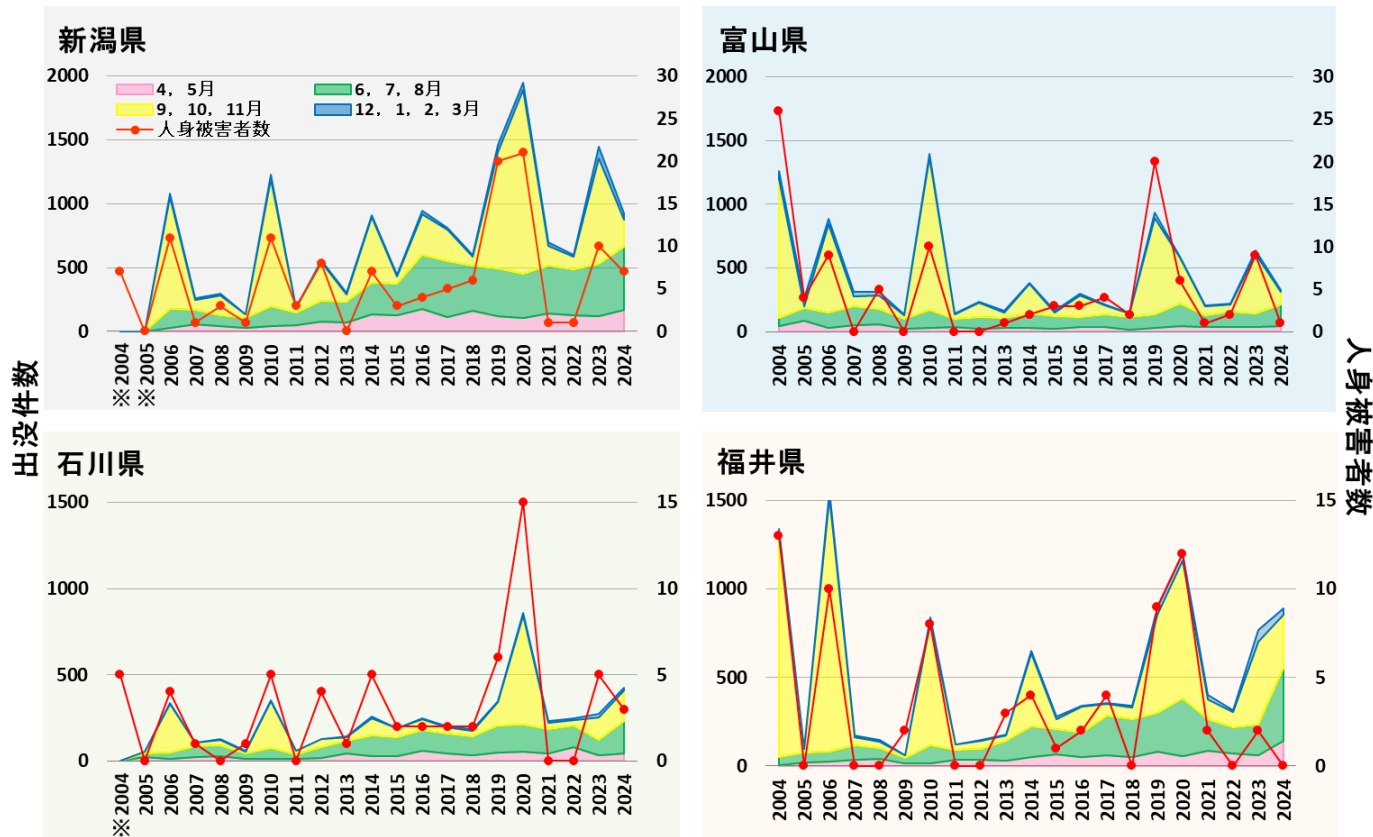


図6 北陸4県の出没件数（季節別）と年間の人身被害者数

石川県の出没件数は目撃件数のみで痕跡等を含まない。※印は、出没件数データがない年。

② 人身事故 ▶11件の事故があった。新潟7件7人(春1・夏3・秋3)、富山1件1人(夏1)、石川3件3人(春2・秋1)で、夏ピーク型の大量出没年となった福井は0件だった。過去10年の平均に比べ新潟と石川は同程度、富山と福井は少なかった。発生した季節は春3件・夏4件・秋4件で、秋前が多かった。事故発生時の状況は、農作業中と農地へ移動中4件、犬の散歩中1件、自宅裏竹林で作業中1件など人の生活圏・クマ遭遇を意識しないであろう場面が計6件で過半数を占めた。登山中や山林散策中の事故は5件だった。

③ 捕獲数 ▶許可捕獲頭数は、過去10年の平均に比べ新潟は少なく、富山は同程度、石川と福井は多かった。夏ピーク型の大量出没年となった福井は、秋に大量出没が生じた2023年の140頭(うち放獣16)を上回る169頭(うち放獣7)を捕獲し、最も多かった月は6月で年間の3割にあたる56頭を捕獲した。また新潟は2023年443頭から2024年203頭と半減はしたものの、これまでの推移からみると高い水準となった。狩猟による捕獲数は4県とも多くはないと推測される。

④ 農作物被害 ▶詳細は把握していないが、4県ともクマによる農業被害の報告はないか、あっても極僅かである。イノシシ・シカ・サル等の対策として設置する電気柵が効果を発揮しているようだ。林業においては、各県とも「クマ剥ぎ」による被害報告がある。

⑤ 堅果類の結実状況 ▶4県ともブナ・ミズナラ・コナラの3種を中心に調査し9月頃に結果を公表している。新潟・富山・福井は昨年より良好、石川はブナが凶作だがミズナラは豊作で、どこも概ね山の実りが良い傾向となった。なお石川の白山地域ではカシナガ被害によるミズナラ・コナラの枯死が見られたほか、ミズナラ等は豊作と予想されたが夏～秋の出没は案外多く、夏の猛暑により不完全な堅果が増えているのではないかと考えられた。▶新潟ではブナの豊凶が秋の出没数に強く影響することが明らかになっている。2024年はブナの豊凶指数は0.56と並作以下であったが現地調査の結果から地域差・林分差・個体差によるバラつきがあり、ある程度の着花・結実が認められた。その影響によるものか、これまでのブナ豊凶指数から秋の出

没数を予測するモデルから得る予測値よりも実際の出没数は少なくなった。（新潟においては）ブナは秋の出没を予測するのに重要な樹種であるものの（豊作や凶作以外の）並作年での評価は難しいと考えられる。

⑥ 出没対策 ▶4県ともカキの伐倒や早期収穫などの誘引物除去、藪の刈り払いなど侵入経路や潜み場を減らす対策を進めているが、対象地域は広い。緩衝地帯とされる地域での対策は徹底できているとは言い難い。

⑦ その他 ▶石川では狩猟者育成やクマ対策研修を頻繁に開催するなど捕獲人材の育成に取り組んでいる。富山・石川・福井では通信機能付トレイルカメラで監視を行い、AIがクマを検出した場合には関係者へ即時メール通知を行うシステムの導入が拡大した。また環境省事業として既存の「道路カメラ・河川カメラ」の画像を、AIが監視してクマの出没を把握する実証実験も富山にて進めた。

はドングリが凶～並作であったものの、地域によってはドングリなどの食べ物がある程度十分にあったことが考えられる。

▶静岡：クマと断定できないものを含み154件での情報があり、2013年度以降最多であった2023年度の121件を上回った。うち10件ほどは主な生息確認地域（2018年度環境省調査）から外れた地域での目撃情報で、その中には伊豆市湯ヶ島の1件も含まれる。2023年度は秋に目撃情報が多かったのに対して2024年度は初夏に多く、これらに影響した要因として2023年秋の結実不良が考えられている。▶長野：里地での目撃件数は大量出没年（2006、2010、2024年）を除いた年の平均値より多めだった。大量出没年とは異なり9月以降の目撃件数は減少したが、8月だけではなく6月にも多かったことが2023年と2024年の特徴であり、総件数の多さにつながった。



玉谷 宏夫（NPO法人ピッキオ）
朝倉 美波（信州ツキノワグマ研究会）
橋本 操（岐阜大学）
澤井 謙二（静岡県立森林公園）

① 出没 ▶愛知：12件の目撃情報があった。このうち、瀬戸市での4件の目撃地点は近接しており、同一個体の可能性が指摘されている。そのほか、足跡などの痕跡情報が3件、定点カメラによる山中での撮影（豊田市が実施）が3件、くくり罠による錯誤捕獲が1件あった。例年情報のない春日井市や犬山市で目撃や痕跡の情報があった。▶岐阜：2024年度の出没の特徴は、大きく分けると①6月での目撃件数が最も多く、その後減少しているパターン、②6～7月にかけて目撃件数が多くなり、その後減少し、10月に目撃が再度増加するという例年と同じパターンの地域があったことである。とりわけ、飛騨地域では6月に目撃件数の多さが目立ったが、その後秋に向けて減少したのに対し、西濃地域では例年同様6～7月に目撃が増加し、その後落ち着いた後、再び10月に目撃が増加してピークを迎えるという例年と同じ傾向が見られた。6～7月にクマの目撃件数が多くなったのは、親離れをする若い個体の分散との関係が考えられる。また、秋にクマの目撃が少なかった理由として、県全体で

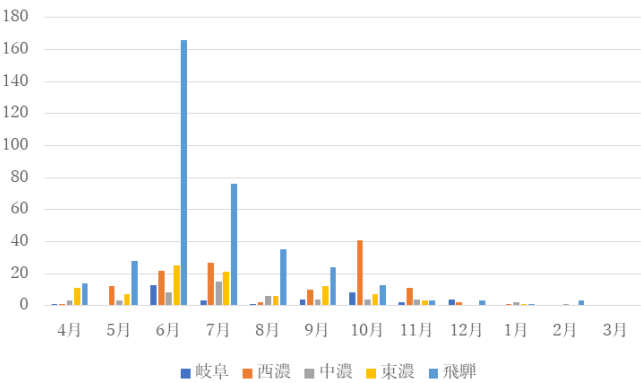


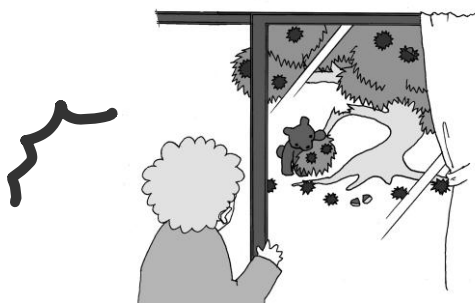
図7 岐阜県の各地域におけるクマ目撃件数(2024年)

② 人身事故 ▶愛知：なし。▶岐阜：2024年度の人身事故は3件(飛騨地域の下呂市、西濃地域の揖斐川町、中濃地域の郡上市)で発生した。6月の下呂市では農作業中の80代女性、6月の揖斐川町では溪流釣りの70代の男性、9月の郡上市でも溪流釣りの30代男性が被害にあった。揖斐川町、郡上市での被害者は、いずれも地域外から釣りに来ていた方だった。9月の郡上市の事故では、鈴を持っていたが、立ち止まって釣りをしていて音が出ていない、川の音で鈴の音が聞こえにくいなどの状況であった。振り返って初めてクマが近くに来ていることに気づいたとのことであり、川のため、人間の方でもクマが近づいてくる音

に気づけなかった状況がうかがえた。▶静岡：なし。▶長野：6月から11月までの間に12件(13名)の事故が発生した。前年は11件(12名)だった。人間の生活圏で起きた事故は5件(6名)であり、うち3件が朝(4～8時台)、1件が夕方(16時台)、1件が深夜(1:30)に発生した。山林内での事故7件(7名)のうち、2件は錯誤捕獲されたクマの状況確認中に起き、そのほかは登山などのレクリエーションや、山林での作業中に発生した。なお、統計には含まれていないが、6月に信濃町の山林内で死亡した男性の顔や背中には引っかき傷があり、クマと接触した可能性もある。

③ 捕獲数 ▶愛知：錯誤捕獲が1件あり、放獣された。▶岐阜：許可捕獲、狩猟ともに現在集計中のため詳細は不明である。「クママップ」のデータをみると、クマの目撃件数に合わせて捕獲頭数の増減が生じているという傾向は例年同様である。▶静岡：27頭が許可捕獲された。▶長野：捕殺数は速報値で、許可捕獲によるものが259頭（うち7頭が春期捕獲）、市町村許可による緊急捕獲が65頭（うち58頭が錯誤捕獲時※）の計324頭だった。27頭を放獣した。錯誤捕獲（放獣）は278頭と2023年度の357頭よりは少なかったものの、依然として多い。狩猟では2頭が捕獲された。なお、長野県では狩猟が始まる11月15日を捕獲管理の起点にしており、許可捕獲による狩猟への影響は基本的にない。

※くくり罠が足首に確実にかかっていない等、捕獲個体の安全な放獣が困難と認められた場合による対応



④ 農作物被害 ▶愛知：なし。▶岐阜：特徴的な被害はなかった。▶静岡：林業被害（樹皮剥ぎ）が山間部で発生している。▶長野：1991年度に20億円以上あった野生鳥獣による農林業被害額は、2015年度に10億円を下回るなど減少傾向にあるが、近年は減少幅が

縮小し、2022年から増加に転じた。クマによる農林業被害は全体の約2割を占め、2020年以降は被害の多い状態が続いている。2023年度はクマによる農林業被害額約1億3千万円のうち、南信州、木曽、松本での立木の皮剥ぎ被害が87.5%を占めた。

⑤ 堅果類の結実状況 ▶愛知：ミズナラは凶作、コナラは並作であり、全県的には並作だった。▶岐阜：堅果類豊凶予測調査では、県全体でみるとブナ・ミズナラ凶作、コナラ並作となっていた。しかし、地域別にみると西濃北部のミズナラが豊作、中濃南部でコナラが大豊作、飛騨北部でブナが並作、南部でミズナラが並作であり、ドングリのなりが良い地域もみられた。▶静岡：情報なし。▶長野：9月末の時点で、ブナ：並作(不作～豊作)、ミズナラ・コナラ：並作下(不作～豊作)、クリ・クヌギ等：並作(凶作～大豊作)で、2023年度と比較して着果状況が良く、一定程度の結実が見込まれるとのプレスリリースを出した。2024年秋冬は大量出沒とはなりにくとしたものの、2025年春夏には子連れのクマの出沒が多くなると予想し、注意を呼びかけた。この結果ほかを受けて、長野県全域にはツキノワグマ出沒注意報(6月5日～11月14日)、佐久・上伊那・木曽・北アルプス・北信地域には出沒警報(9月9日～11月14日)が発出された。

⑥ 出沒対策 ▶岐阜：県での取り組みとして、以下の対策を実施した。(1)アーバンベアモニタリング調査事業一飛騨市の市街地の林縁部を中心に、クマの生息状況についての調査を実施した。加えて、「令和6年度アーバンベアモニタリング調査にかかる研修会」を実施した。(2)ツキノワグマ食性分析調査業務一捕獲個体の体毛や糞便から餌を推定することによって、捕獲地域のツキノワグマの食性を把握した。2024年度については業務開始時期の関係から狩猟個体の糞分析をしたが、今後は有害鳥獣捕獲個体で実施し、里周辺に出沒する個体の食性を調べることを検討している。(3)ツキノワグマ情報解析業務一県内の森林や耕作地等における土地利用状況がわかる衛星画像データとクマの出沒情報から、誘因の解析を実施した。▶静岡：(1)クマ出沒について注意喚起をするためのチラシやクマ出沒マップを県のHPに掲載中。(2)2024年度からの2ヶ

年事業として、生息域を中心にセンサーカメラや捕獲 & GPS追跡による調査を実施中。

▶長野：(1)実態把握・モニタリング強化のため全県域で生息状況調査を実施。大量出沒の発生予測につなげるため堅果類豊凶調査の精度を向上。(2)「クマ対策員」事業により、人身事故や出沒頻発地点の現場検証と原因究明を積極的に推進。一般市民向けの普及啓発イベントも実施。(3)2024年度から運用を開始したクマ出沒「注意報」と「警報」の発出基準の見直しを進め、さらに明確に注意を促すための「特別警報」を設ける案を提示。発出にあたっては、基準を踏まえた上で行政担当者や専門家が状況を判断し、適切な範囲や期間で運用することを検討。(4)管理導入マニュアルの配布やワークショップ開催経費等の支援を通じて、全市町村でゾーニングの導入を促進。(5)麻酔銃の講習会を開き、対策の担い手確保・育成に取り組むほか、市街地での「緊急銃猟」について、県が市町村向けの説明会などを順次開催予定。(6)北アルプス、上高地、軽井沢などでは生息地内での被害対策活動を継続。下高井農林高校では誘引物となる柿をもぎ取る「シブガキ応援隊」が2016年から活動中。

⑦ その他 ▶岐阜：2025年度は県として以下の事業を実施する予定である。(1)令和7年度ツキノワグマ生息状況調査一飛騨地域で自動撮影カメラによる個体識別調査と食性分析を実施する。これらにより、個体数の把握や人間の生活圏への依存状況を把握し、個体数管理やクマが出沒しない集落環境、里山整備を推進する。(2)クママップによる情報提供の継続一県域統合型GIS「クママップ」による情報提供を引き続き、各市町村へ周知する。(3)県や市町村職員向けの対策研修会の開催一クマによる人身被害等の防止に向け、地域住民だけでなく、県や市町村職員に対しても研修会を実施する。

▶長野：(1)子供向けクマ絵本やかたるた（信州ツキノワグマ研究会）、軽井沢周辺のクマに関する科学雑誌（福音館書店）なども用いて、子供たちに向けた普及啓発活動を積極的に実施中。(2)12月21日に佐久平交流センターにてJBN公開シンポジウム「長野・静岡・岐阜におけるクマ対策の歩みとこれから」を開催し、約170名の方にお越しいただいた。



中川 恒祐 & 野瀬 遵
((株)野生動物保護管理事務所)

① 出沒 ▶近畿北部地域(兵庫県、京都府、滋賀県、大阪府)(以下、北部)：出沒の少ない大阪府を除く各府県の出沒状況を、環境省発表の速報値をもとにグラフにまとめた(各府県12月まで)。グラフでは2024年度と過去4年間(2020~2023)の各月の出沒数を示している。2024年度はどの府県でも出沒が非常に多く、集落やその周辺での出沒が多数発生した。滋賀県では例年と同じく春から初夏の出沒が多かったことに加えて、秋に並外れて大きな出沒数のピークがあった。京都府では、11、12月を除いて1年を通して出沒が非常に多かった。特に春から夏にかけて過去にほとんどないレベルで出沒が多数発生した。兵庫県は全ての季節を通して過年度に比べて出沒数が大幅に増加した。特に秋に並外れて出沒数が増加した。兵庫県は他府県と比べると春よりも秋の出沒数が増加する傾向がみられるが、2024年

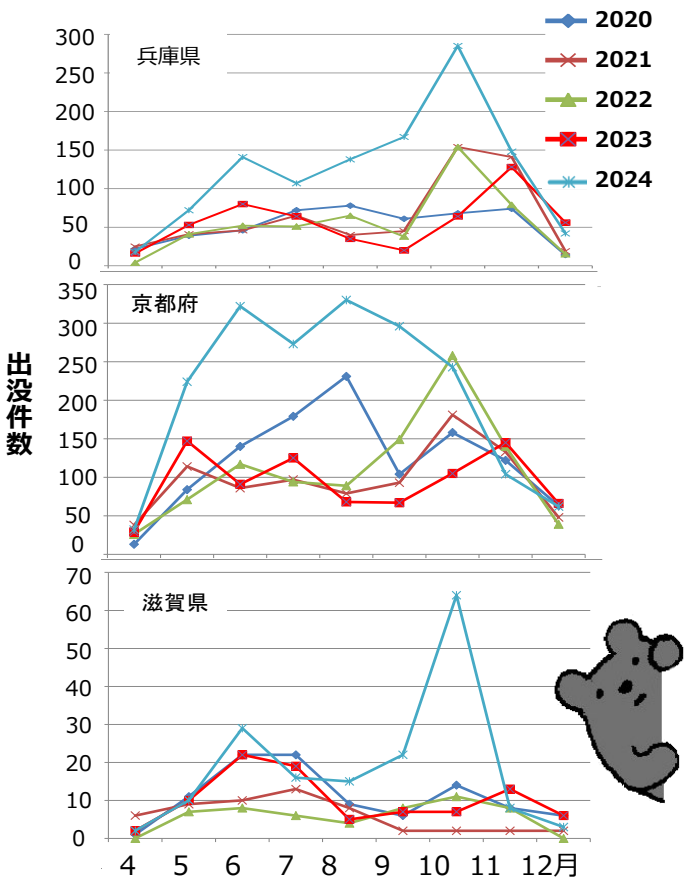


図8 兵庫県・京都府・滋賀県における
2020~2024年の各月出沒数



度はその傾向が顕著にみられた。大阪府では15件の出没があり、近年出没が徐々に増加していることから、今後の状況に注視が必要である。▶近畿南部地域(奈良県、和歌山県、三重県)(以下、南部)：環境省発表の速報値によると、3月末の時点で奈良県は143件、和歌山県は180件、三重県は162件の出没が発生した。どの県も例年は10～70件の出没数であったことと比較すると、顕著に出没が多かった。近年、和歌山県、奈良県は緩やかな増加傾向を示していたが、突然出没数が跳ね上がった。3県ともにほぼ全ての季節で出没が多く、その原因は明確には分かっていない。なお、近畿南部のツキノワグマ(紀伊半島地域個体群)は環境省の定める「絶滅の恐れのある地域個体群」に指定されている。

② 人身事故 ▶北部：京都府で1件、兵庫県で2件の人身事故が発生した。幸い死者は出ていない。京都府の事故は自宅の敷地内で発生したもので、兵庫県の事故は2件ともわなに捕獲された個体の攻撃を受けたものである。▶南部：2024年度は、三重県で1件、奈良県で1件の人身被害が発生した。三重県の事故は登山道で登山客が被害にあったものである。

③ 捕獲数 ▶北部：兵庫県、京都府では平成29年からゾーニング管理が実施されており、それ以前に比べると集落周辺での有害捕獲が増加している。両府県の捕殺数は兵庫県で107頭、京都府で280頭であり、両府県ともに過去5年間で最も高い数値であった。人の生活圏周辺での出没が多発したため、対策として捕獲が推進された結果である。また、滋賀県では3頭、大阪府では捕殺はなかった。2024年度は京都府では狩猟が解禁され、兵庫県では禁止された。滋賀県では例年通り狩猟は自粛となっている。▶南部：2024年度は、三重県で6頭、奈良県で1頭の捕殺が実施された(環境省発表)。



④ 農作物被害 ▶北部：京都府、滋賀県では人工林への剥皮被害(クマハギ)が毎年一定程度発生している。クマハギへの対策として、テープ巻き防除が実施されている。兵庫県、京都府では例年はカキが出没要因として大きな割合を占めるが、2024年度は多くの地域でカキが不作であったためカキの被害は例年より少なかった。▶南部：紀伊半島では一般的な農作物被害はほとんど発生せず、集落周辺や山中に置かれた蜜胴の被害がある。

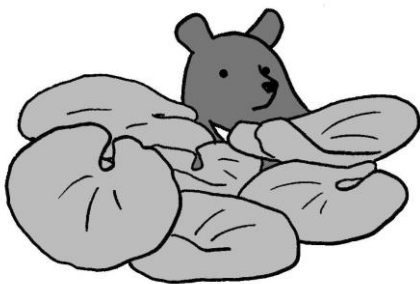
⑤ 堅果類の結実状況 ▶北部：兵庫県、京都府、滋賀県では豊凶調査が実施されている。兵庫県ではミズナラ、ブナが大凶作、コナラが凶作で3種全体では大凶作であった。京都府ではミズナラ、コナラ、ブナ全てが凶作であった。滋賀県ではミズナラが不作、コナラが並作、ブナが凶作であった。なお、各府県の作柄の設定や判定基準は異なるため、府県間の結果の比較はできない。

表2 兵庫県・京都府・滋賀県における堅果類の豊凶 (2017～2024年度)

		2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
兵庫県	ミズナラ	豊作	並上	凶作	並下	凶作	並上	大凶作	大凶作
	コナラ	豊作	並下	並下	凶作	並下	並上	豊作	凶作
	ブナ	並上	凶作	大凶作	大凶作	豊作	大凶作	大凶作	大凶作
京都府	ミズナラ	並作	並作	凶作	並作	並作	凶作	並作	凶作
	コナラ	並作	並作	凶作	凶作	並作	並作	並作	凶作
	ブナ	並作	凶作	凶作	凶作	豊作	凶作	凶作	凶作
滋賀県	ミズナラ	並作	不作	凶作	並作	不作	不作	不作	不作
	コナラ	不作	不作	不作	不作	不作	不作	不作	並作
	ブナ	凶作	不作	凶作	凶作	不作	凶作	凶作	凶作

⑥ 出没対策 ▶クマを誘引する集落内の不要なカキやクリの木の伐採を行政として推奨している。また、集落周りの動物が隠れられる藪などを刈り払い、バッファゾーンを設置している。果樹等の被害防止のため、電気柵等の対策も行われている。兵庫県は轟音玉等によりクマの追払いを実施することもある。兵庫県では、民間企業に委託した鳥獣対策サポーター事業を実施しており、市町村からの委託により獣種に限らない総合対策(実態把握、点検、指導など)を行っている。

⑦ **その他** ▶北部：近年、近畿北部に生息する東中国地域個体群と北近畿東部・西部個体群について、地域個体群単位で個体数を推定し、広域管理を行う取り組みが進んでいる。近畿地方では1990年代から錯誤捕獲や出沒に対する対応体制が構築されており、現在もよく機能している。しかし、2024年度のような集落への波動的な大量出沒が発生すると、対処療法としての捕殺しか手がないのが現実である。今後は集落への出沒自体を防ぐ電気柵や環境整備などの被害防除対策が一層求められる。▶南部：2024年度に紀伊半島地域個体群全体を対象とした個体数調査が実施された。近年の出沒数の増加や2024年度の急増を受けて、各県ではツキノワグマに対する警戒が高まっている。この状況を受けて、三重県では出沒マップの提供が開始され、出沒アラートも発出された。奈良県ではGPS付き首輪による行動調査が行われている。環境省が分布拡大域として監視区域に位置付けている鈴鹿山系では、近年ツキノワグマの目撃や痕跡情報が増加している。奈良県と三重県の県境付近では、ナラ枯れが進み、2024年になってからミズナラの枯損が目立つようになっている。



澤田 誠吾、石橋 悠樹（島根県）
西 信介（鳥取県）

① **出沒** ▶島根県西部地域を除いて市街地の出沒は特に目立っていない。西中国地域において、島根県西部地域では、春先から出沒数が多くなり、6月にピーク迎え7月以降も高い値で推移して、大量出沒となった。一方、広島県と山口県は、9月から出沒数が増加し、10月にピークとなり11月には減少した。東中国地域の出沒は少なかったが、鳥取県は10、

11月に出沒が増加した（図1）。

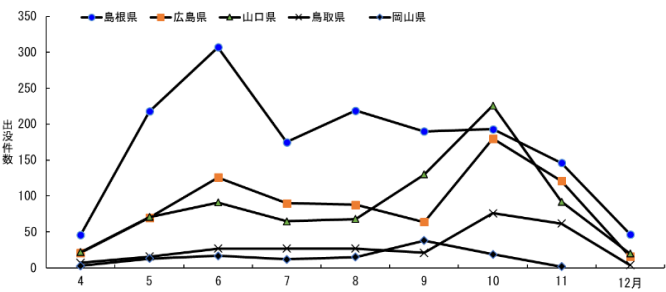


図9 中国地方における月別出沒件数

② **人身事故** ▶市街地・集落内での事故が目立った。島根県1件(10月：散歩中)、広島県&岡山県0件、山口県3件(9月：歩行中 10月：ランニング中 11月：狩猟中)、鳥取県0件。
▶島根県の1事例の概要：発生日時—2024年10月25日 21:45頃；負傷者—50歳代男性；被害状況—犬の散歩をしていたところ、犬が強く歩きだし、犬に引っ張られるがまま歩いていたところ、カキの木にクマがいて、左太ももを引っかかれたが軽傷だった。翌日、鳥獣専門指導員が現場検証を実施したところ、カキの木には新しい爪痕が残っていた。事故が発生した地域は、これまでクマによるカキの被害はほとんど発生していなかった。鳥獣専門指導員がカキはクマを引き寄せる強力な誘引物であることを説明し、地域主体でカキもぎが実施された。

③ **捕獲数** ▶島根県346頭、広島県は98頭、山口県は89頭、鳥取県123頭、岡山県24頭であった（図2）。西中国地域は、大量出沒となった。とくに島根県の捕獲数が突出して多く、5、6月は若い個体が多かったが、7月からは高齢個体の捕獲も目立った。また、鳥取県は10、11月に捕獲数が増加した。

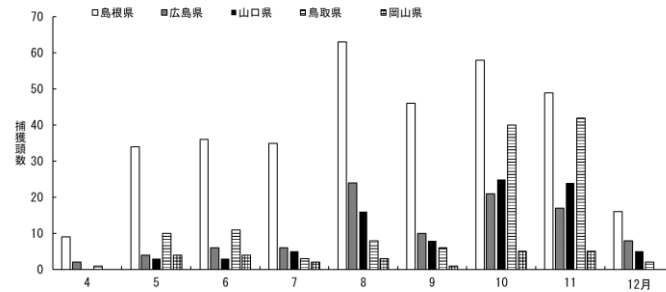


図10 中国地方における月別捕獲数

④ **農作物被害** ▶島根県では大量出沒となったが、県西部地域では8月に青カキの食害

があり、その後トマトの食害が発生した。トマトの食害は県内で初めての被害であった。また、この地域では2012年のハクサイ以来の野菜の被害であった。

⑤ **堅果類の結実状況** ▶西中国地域(目視調査)：ブナ、クマノミズキは凶作、ミズナラ、コナラ、スダジイは並作、シバクリ、アラカシ、シラカシは豊作。▶鳥取県：ブナ、ミズナラは並作下、コナラは大凶作、クリは凶作。▶岡山県：ブナ、ミズナラ、コナラ共に凶作。

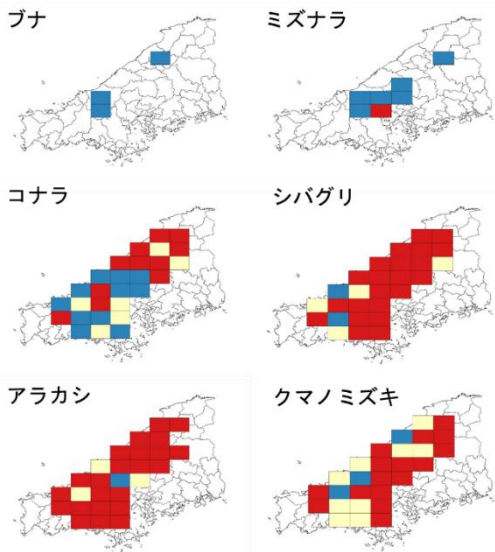


図11 西中国地域の目視による豊凶調査の結果

⑥ **出沒対策** ▶鳥取県：市町村担当者、県担当者および実施隊に向けて、クマ出沒対応・追い払い研修を実施した。また、追い払い研修では煙火消費保安手帳の講習会も同時に開催されて手帳の更新等が行われた。▶広島県：クマレンジャーのスキルアップ研修が開催されて、クマの被害実態や痕跡の見分け方について再確認された。▶島根県：年度初めに市町担当者、警察、県担当者の顔合わせを兼ねた市街地出沒シミュレーション研修を各管内で開催した。

⑦ **その他** ▶島根県のコアエリアにおいて5月に5件、6月に1件、7月に13件、8月に2件のクマの住居侵入が発生した。発生した住居侵入のうち、5月では4件、6月では1件、7月では9件で住居内の冷蔵庫等を荒らすなどの何らかの食害を発生させた。21件もの住居侵入はこれまでに例がなく、侵入の要因を分析して今後の対策につなげていく必要がある。



山田 孝樹
(四国自然史科学研究センター)

① **出沒** ▶クマの生息地域内で集落等が付近にない林道や登山道において、2件の目撃情報に寄せられた。また、山間部の集落周辺でクマによる古い樹皮剥ぎ木が確認され、自動撮影カメラを設置したが撮影はなかった。

② **人身事故** ▶特に情報なし。

③ **捕獲数** ▶2件錯誤捕獲が発生した（ニホンジカ捕獲用のくくり罠）。うち1件は錯誤捕獲発見の翌日に放獣対応に現地に行くが自力でくくり罠を外し、逃走していた。残る1件は、当該個体は錯誤捕獲発見の翌日に現地にて放獣された。

④ **農作物被害** ▶特に情報なし。

⑤ **堅果類の結実状況** ▶ブナとミズナラの豊凶を目視調査により把握している。ブナは36地点108本で調査を行い豊作、ミズナラは73地点219本で調査を行い凶作であった。

⑥ **出沒対策** ▶四国森林管理局及び徳島県のHPでクマの目撃情報が公開され、注意喚起がされている。

⑦ **その他** ▶地球環境基金助成によるプロジェクト(2024年度は3年間の2年目)を実施。プロジェクトでは引き続き、JBN及び日本自然保護協会と連携・協働して活動を実施している(下記二次元バーコード左)。▶上記プロジェクトによって、生息地内にある那賀町木頭において「第3回木頭クマ祭り」を開催し、当日の様子をYouTubeチャンネルで公開している(二次元バーコード右)。▶2024年度に各機関が実施した調査によって、27頭(当歳幼獣5頭を含む)のツキノワグマが確認され、これまでの調査では最多の識別数となった。また、親子については4組確認された。



◀四国プロジェクトHP
第3回木頭クマ祭り▶



九州地区は、特に報告なしとのことでした